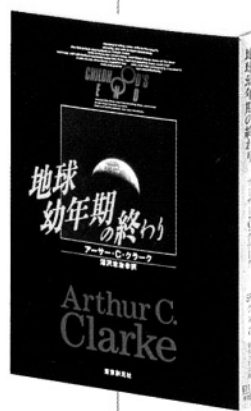


言葉との邂逅

地球幼年期の終わり アーサー・C・クラーク 沼沢治治 ○東京創元社

地球幼年期の終わり — Childhood's End —



人類は、いま、いかなる時代を歩んでいるのか。

そのことを考えるとき、我々がしばしば口にする言葉に、ふと疑問が沸いてくる。

例えば、「高度に発達した科学技術」という言葉。

たしかに、いま、先進国に住む我々は、情報技術でも、医療技術でも、最先端の技術を使い、その恩恵に十全に浴している。

しかし、もし、遠い未来の人類が、いま我々が使っている技術を見るならば、おそらく、「極めて原始的な技術を使っている」と評するだろう。

例えば、「高度に発達した資本主義」という言葉。

たしかに、高度な金融技術を駆使した最先端の資本主義が、世界を席卷しているかに見える。

しかし、やはり遠い未来の人類から見ると、「世界の片隅での小さな破綻が、一挙に世界全体を経済危機に巻き込むほど、危うい未熟な経済システムに立脚していた」と評するだろう。

もし、人類の歴史というものを、明治維新の人物伝や、ローマ帝国の興亡といった次元を超え、数千年の未来の人類という視野で見つめるならば、誰もが気がつくその事実には、日々の仕事に追われ、視野狭窄に陥った我々は、決して気がつかない。

そして、その大切な事実が気がつかせてくれるのは、ドキュメントラリーでも、ノンフィクションでもなく、ときに、想像力を極限にまで飛翔させ、未来の物語を語ったSF小説であろう。

『地球幼年期の終わり』

SF小説の巨匠アーサー・C・クラーク。そして、彼の金字塔とも呼ばれるこの作品の生命力は、その意外性に満ちた壮大な物語の力以上に、実は、このタイトルの持つ言霊の力であろう。

我々人類は、まだ、「幼年期」の時代を歩んでいる。

それは、いまだ、この地球上を、戦争、テロ、飢餓、貧困、抑圧、差別、破壊が覆っている現実を見るならば、誰もが頷くメッセージであろう。

そして、それは、ある意味で、現代を生きる我々を、深く励ますメッセージでもある。

かつて、この地球上では、恐竜が、一億年以上栄え、そして、去っていった。

しかし、人類は、まだ、その誕生からわずか数百万年、その文

明は、数千年しか経っていない。されば、人類の歴史は、まだ始まったばかり。

そして、我々は、いつの日か、この「幼年期」の時代に終わりを告げる。

では、そのとき、我々は、いかなる時代の幕を開けるのか。

一人の人間の生を超え、その壮大なスケールの未来に思いを馳せるとき、悲惨と混乱に満ちた現在の世界にあって、それでもなお、我々の中に、この時代を生きる勇気が生まれてくる。



田坂広志 多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK